

デザイン教育の概要

高知工科大学工学部社会システム工学科は、建築学・土木工学・都市工学を融合した建設系の学科である。カリキュラムの中では、いわゆるデザイン教育（意匠に関する教育）に多くの時間を割いているのが特徴である(表1)。土木分野のデザイン教育としては、2年次の「景観デザイン」が一般教養的な景観に関する基礎知識・技術を身に付けるものであり、3年次の「景観デザイン演習」4年次の「卒業設計(社会システム設計演習)」と進むにしたがって、内容が高度になり専門的になる。それにしたがって履修する学生数にも変化が見られ、表1に示すように「景観デザイン」は大部分の学生が履修するが、「景観デザイン演習」は6割程度の学生が履修している。図1～7に学生の成果品の一部を示す。

一般教養的な大人数教育

2年次の「景観デザイン」の目的は、①将来、デザイナーの理解者になってくれる人材を育てる、②景観デザインとは、どのようなもので、なぜ重要なのかということを理解させる、という2点である。全ての学生が意匠設計のプロとなるわけではない。しかし、プロとデザインの議論ができるようになることは全ての学生に必要なことである。学生は、景観デザインの基礎的概念を学び、風景を見る目、語ることばを養う。また、図面やスケッチの描き方などの基礎的な訓練を行う。それらは、図2の「景観デザインの評価レポート」として成果品にまとめられる。

専門家向けの少人数教育

3年次の「景観デザイン演習」以降は次第に内容が専門的になる。講義の目的は、①将来プロのデザイナーになる人材を育てる、②デザイナーでなくても、デザインに造詣の深い技術者を育てる、の2点である。ここでは、デザイン演習を通して専門的な知識や技術を修得することになる。その中でも、もっとも大切だと考えられるのは、「統合」としてのデザインのあり方を学ぶことである。大学における多くの講義は、問題解決のために「分析」を行う作業である。それに対してデザインとは、関連する全ての要素を考慮に入れ、取捨選択や重み付け、交渉を行いながら1つの施設や空間をまとめ上げるという「統合」の作業である。そのため専門家向けのデザイン教育における演習課題では、デザイン以外の科目(力学、計画学、史学、人文・社会科学など)で学んだ内容も含まれている。学生は、それらの専門の先生の協力を仰ぎながら演習を進めることにより「統合」という作業を体験し、設計思想や論理を身に付ける。それらは、図5～7の成果品にまとめられる。

教育の成果

高知工科大学は1997年に開学したため、本稿の執筆時点(2000年3月)で1期生は3年生であり、教育の成果を評価するためには時期尚早である。これから卒業設計(8単位)が始まり、その後彼らが卒業した時点で教育成果の評価ができると考えている。請う御期待。

表1 デザイン教育科目の概要

科目名	開講時期	単位数	必修/選択	担当教員など	受講者数 (総数114)
建築デザイン	1年1Q	2	選択	吉田 TA2名	111人
景観デザイン	2年1Q	2	選択	重山	112人
CAD*	2年3Q	2	選択	重山 TA3名	111人
建築計画	2年4Q	2	選択	吉田 TA2名	111人
景観デザイン演習	3年1Q*3	2	選択	重山	60人
建築デザイン演習	3年2Q	2	選択	吉田 TA2名	64人
卒業設計*2*4	4年1~2Q	8	選択	重山・吉田ほか	
景観デザイン特論	4年3Q	2	選択	重山	
建築デザイン特論	4年4Q	2	選択	吉田	
都市空間論	M1年3Q	2	選択	重山	
建築設計論	M1年4Q	2	選択	吉田	
修士論文	M2年	8	必修	重山・吉田ほか	

* CADの正式名称は、「社会システム情報2」

* 2 卒業設計の正式名称は「社会システム設計演習」

* 3 1997年入学生は3年3Qに開講

* 4 4年以降の講義・演習は未開講、または、少人数対象に開講

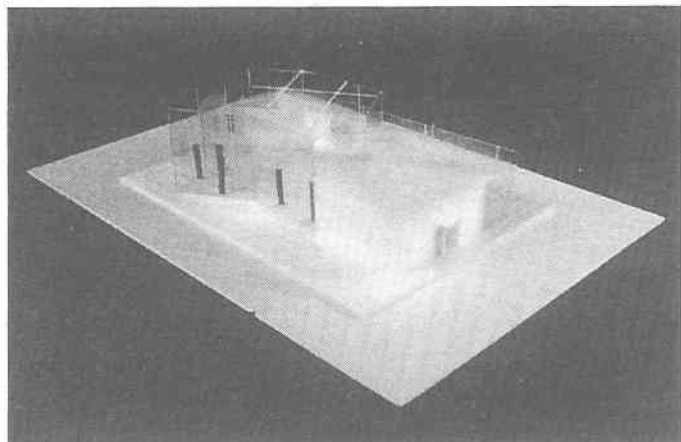


図1 建築デザイン「風の建築」1年1Q

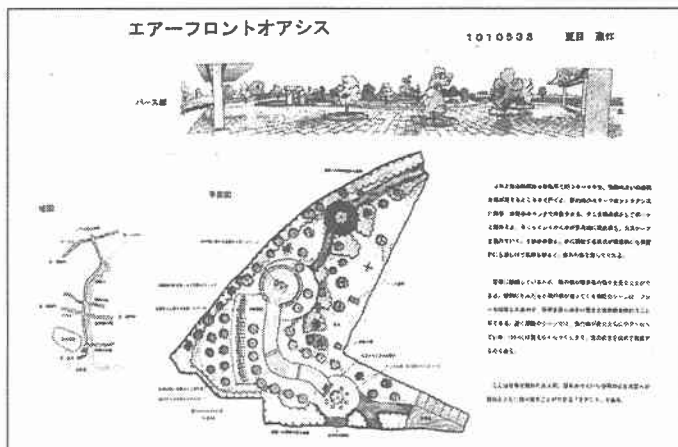


図2 景観デザイン「景観の評価レポート」2年1Q

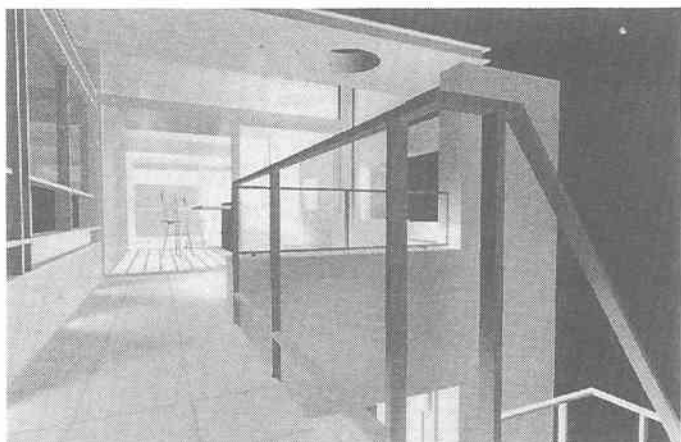


図3 CAD「図面をCADで3次元に立体化」2年3Q

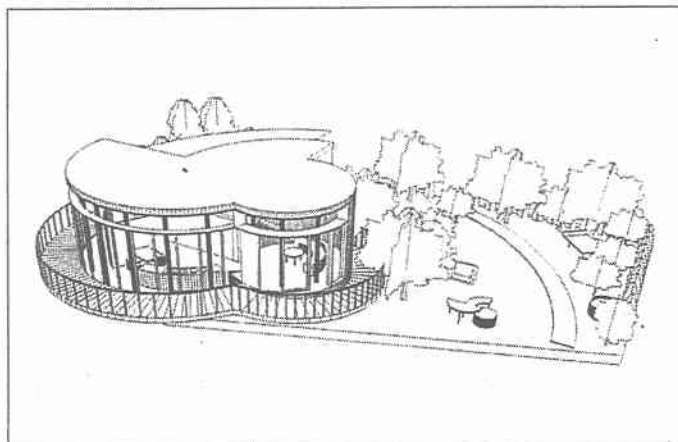


図4 建築計画「小住宅のデザイン」2年4Q



図5 景観デザイン演習「水辺のデザイン」3年1Q

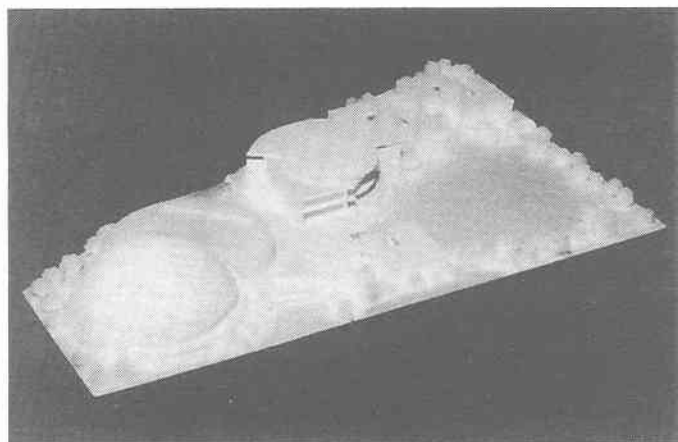


図6 建築デザイン演習「小学校のデザイン」3年2Q

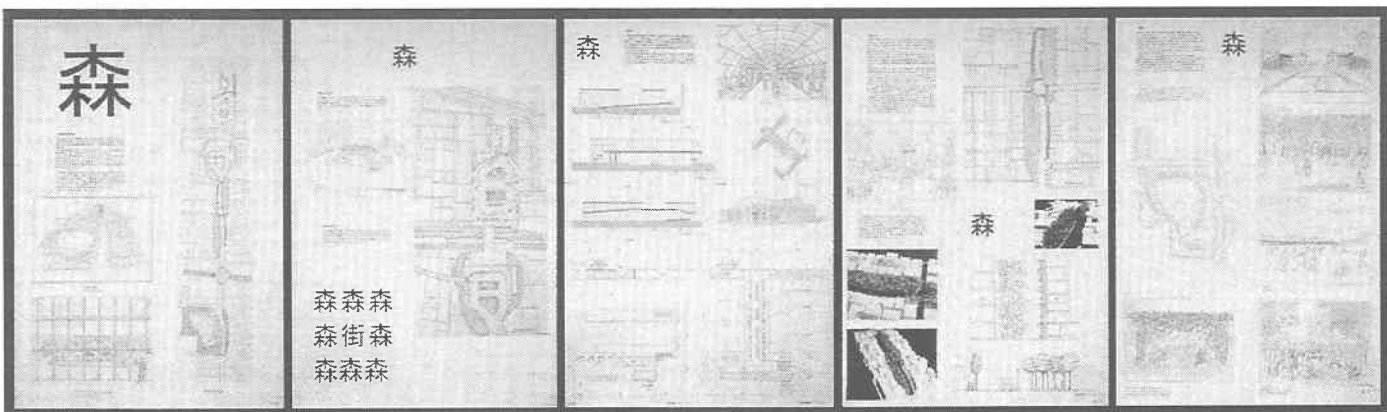


図7 景観デザイン演習「都市のデザイン」3年1Q A1サイズ5枚組(5人グループの作業)